祈りをささげる

麟龍凰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
祈りをささげる

【Ｎコード】
Ｎ９５８６Ｗ

【作者名】
麟龍凰

【あらすじ】
「俺たち以外、人間が消えた！」
陣内トオルは、突如親友の東条直人からそう告げられた。変わりゆ人間。逃げのびようとする二人。
その裏には、とんでもない事実が隠されれいた……

プロローグ

円い大きなテーブルに、三人の男たちが腰をかけていた。男たちは全員顔面を覆うマスクのようなものをつけ、服装も全員一致して薄暗い青色の羽織の様なものを着ている。

まるでなにかの宗教集団のようだった。

「数はどうだ？」

一人の男が言う。それに対し、横にすわっていたもう一人の男は掌を空に向けた。すると、薄い光を帯びたホログラム映像のようなものが出現する。テレビの砂嵐ようにたびたびぶれている。

「３億４１００万。奇数だ」

「そうか、ではまた持ち越しだな」

「そういうことになるな」

その時、二人の話を聞いていた三人目の男が突如口を開いた。

「本当にやるつもりなのか？　まだ少し待ってみてはどうなのだ？」

映像を出していた男は、それを握りつぶすように消すと思い切りテーブルを叩いた。バン！　という音と衝撃が辺りをこだまし、止むと同時に口を開いた。

「いまさら何を言っている。この計画の発案者はお前だろう」

「それはそうだが……」

３人目の男は何も言えない。確かにこの計画は自分は発案したものだが、いざ実行するとなると、急に恐ろしくなったのだ。しかし、いまさらそんなことは二人には言えない。

「そうだな……すまない」

我々は平和のためにやっているんだ。そう自分に言い聞かせた。

「それでは、今回はこれで終了としよう」

最初に発言した男がそう告げ、三人の男たちは解散した。

第一話　日常＝平和（前書き）

本当は短編にしようと思いましたが、長くなりそうなので連載にしました。長いと言っても、僕の長いはみなさんにとって短いです。

第一話　日常＝平和

「ふう～、これで一学期終わりか～」
陣内トオルは、机の上にあるシュルダーバックの中に教科書とノートを詰め込んだ。
今日は終業式だ。置き勉をする必要もない。
トオルの成績は中の上、とくに悪い成績もなく、いたって普通の中学一年生だ。
友達も少なくない。今日も、帰りは親友の東条直人といっしょに帰っている。直人とトオルが仲良くなったのは、決して腐れ縁というわけではない。二人とも同じソフトテニス部で、ペアを組み、仲良くなったのだ。
そもそもトオルがソフトテニス部を選んだ理由は、ただなんとなく大変じゃなさそう、という理由だった。
野球部やサッカー部などは、もともと小学校のころにクラブなどで経験した人達が入るものだ。かといって、美術部などの文化部は内申書に悪い。
そのことを考えると、テニス部が一番だ。テニスを習っている人などそうそういないし、習っていたとしても、硬式テニスだろう。軟式をやっている人間などそうそういまい。
直人もほとんど同じ理由だった。そのことから意気投合した二人は、今の関係にいたる。
半ば投げやりな理由でテニス部を選んだ二人だが、なぜだか順調な勢いで上達し、学年首位に躍り出ている。数少ない一年生の新人戦選手候補も、この二人だ。
終業式と言うこともあってか、午前授業で学校は終わりとなり、今日は部活が無かった。
午前で家に帰れるとなると、テンションも上がる。
直人から、

「今日公園でテニスの練習やろうぜ」
と言われたトオルは、迷うことなく
「オッケー。じゃあ、一時半に壇ノ浦公園に集合な」
と答えた。

壇ノ浦公園は、限りなく普通に近い公園だ。ブランコやすべり台、ジャングルジムといったごく普通の遊具が置かれている。
しかし、やけに表面積が広くテニスをするにはもってこいの場所だった。一つ気になる場所とすれば、雑草が密集してありえない長さになっている場所があるとい事だけだ。幸い、そのような場所は少ない。
「よっしゃ。じゃあやろうぜ」
そして一時半。壇ノ浦公園に集合した二人は、そこらに落ちていた棒で線を引き、即席のテニスコートを作った。
公園などで正式なテニスをする人間はあまりいない。せいぜい、審判を一人着けるくらいだろう。もしくは勝敗などは決めず、相手とラリーを続ける乱打を選ぶ。
トオルと直人も、乱打をしていた。出来るだけ相手が打ちやすい位置に返し、打ち返してきたらもう一度同じことをする。この繰り返しだが、やってみるとなかなか面白い。
二人は時間が経つのを忘れ、ひたすらボールを打っていた。

第二話　不安＝異常（前書き）

おそらくですが、更新が遅くなると思います。

第二話　不安＝異常

「おいやべぇ。もう六時だ」
最初に気付いたのは、直人だった。ボールが後ろにすっ跳んだ時、拾い際にポールについている時計が目に入ったのだ。
二学期の終わりとなると、六時になってもそう暗くはならない。しかし、校則で六時以降の外出は控える、とあるのだ。実際部活も六時で終わる。
「とりあえず今日はこれでお開きにしようぜ。明日は部活だしな」
直人はトオルにそう告げると、そうそうにラケットをカバーに入れた。トオルはもう少しやりたい気もしたが、明日は部活と言うことと、母に怒られるという思いが勝ち、ラケットをカバーにしまった。
「それじゃあバイバイ」
そう言って直人は自転車を走らせていった。トオルと直人の家は、公園を中心に左側にトオルの家、右側に直人の家がある。つまり行きも帰りも別々になってしまう。親友として、そのことはなぜか残念だった。

帰り道一人になると、この町の何かがちがう気がした。別に建物や道路はいつも通りだ。
信号もちゃんと機能している。しかし、何かが違った。
「なんだろうな……なんか違う気が……」
結局何も異変は起きず、普通に家に到着した。だが、何かが違うという気持ちは変わらず頭から離れなかった。
「まあいっか。早く勉強しないと……」
そう言ってドアに手をかけ、いつもどおり引っ張ろうとした。ところが、ドアに鍵がかかっているらしく、しょうがなくインターホンを押した。

ピーンポーンと音が鳴って、数分はたった。しかし、反応はまったくなかった。どうやら外出中らしい。
「おいおい嘘だろ……鍵持ってねぇよ」
駄目もとでポケットをあさってみる。すると、サイフは持っていたのに気付いた。
「公衆電話で呼び出すか……幸い近くにあるし」
つぶやくようにそう言うと、目に見える距離にある公衆電話に近づいた。公衆電話を使用する機会はあまりない。なぜだかしらないが、緊張している自分がいた。
十円玉をいれて、母の携帯の電話番号を入力した。数秒のプルルルという音の後、『ただいま電話に出ることができません』という言葉が耳に入る。
「マジかよ……」
いや、ただ携帯電話がカバンの奥に入ってて音が聞こえないだけなのかもしれない。
そう信じてもう一度公衆電話に手をかけた。
『ただいま電話に出ることができ……』
その言葉が聞こえた時点で電話を切った。間違いない。母は家に携帯電話を忘れて外出している。
「やばぁ……本当にどうしよう。母さん何時になったら帰ってくんだよ」
ひょっとすると、外で一時間以上待っていなきゃいけないかもしれない。そう考えるとぞっとした。すると、一つの考えが頭に浮かんだ。
「そうだ！　直人に連絡して、家に上がらせてもらおう！」
友達の家ならいくらでも待てる。さっそく十円玉を公衆電話に入れて、直人の番号を入力した。
お約束のプルルルル……という音の後、ガチャ、と受話器を取る音がした。
（やった！）

心の中でそう叫ぶ。早く直人の声が聞きたい、という思いでいっぱいになった。
「もしもし、だれですか！」
しかし、その直人の声はいつより荒々しく、どこか焦っている声だった。まるで切羽詰まっている時に声をかけられる、そんな感じだった。
「トオルだけど……どうかしたのか？　なんかいつもと様子が変だぞ」
「トオルか！　良いところに電話してくれた。急いで壇ノ浦公園に来てくれ！」
「え……なんで？」
「いいから来い！」
「は、はい！　分かりました」
あまりにも激しいその声に、思わず警護を使ってしまった。なんだかいつもと様子が変だ。直人は決しておとなしい人間ではないが、あんなに激しい口調は初めてだった。ひょっとして、なにかあったのだろうか？
何とも言えない不安を抱きつつ、再び壇ノ浦公園に自転車を走らせた。

第三話　恐怖＝消失（前書き）

すごい短いですが、ちょうどいいヒキにしたかったので載せました。あと、サブタイトルにすごい迷います……

第三話　恐怖＝消失

「なんだあいつ……人を呼び出しておいて自分来てねえのかよ……」
思わず本音が出てしまった。普段ならこのようなことは無いのだが、電話越しでの直人の言い方が少し癇に障ったのだろう。
「何してようかな……壁打ちでもやるか」
トオルは、背中に背負っていたラケットカバーがラケットを取り出すと、塀に向かって行った。壁打ちは、ボールを落としてそれを打つ、というシンプルな練習だが、これがなかなか為になる。ラケットの中心にボールを当てる練習にも最適だ。
塀と丁度いい距離に立ち、さっそくボールを落とそうとした。その時、横にあった草むらから手がのびて、一瞬にしてトオルを引きずりこんだ。
「うわっ！　なんだなんだ！」
「おい、静かにしろ」
「え……直人？」
目の前にいたのは、直人だった。口に人差指を立て、静かにの合図をしている。トオルは、声を鎮めながらたずねた。
「おい直人。何だよ一体？　帰ってからすぐに呼び出しやがって」
「電話してきたのお前だろ」
「あ……いやそうだけど……。それより、なんだよあの電話での態度。どうかしたのか？」
核心を突かれて、思わず口ごもったトオルだったが、なんとかごまかそうとそう聞いた。
「そうだ、それが本題だった」
直人は思い出したかのように目を見開いた。
そのときの直人の顔つきは、何故だか知らないが恐怖におびえているような顔だった。まるで、見てはいけないものを見てしまったような、そんな顔つきだった。

直人はトオルの肩に手を置き、「いいか落ち着け」と前置きすると、こう言った。
「俺達以外の人間が、消えた！」
「……はい？」

第四話　仰天＝絶句（前書き）

かなりの勢いで更新できてます。こんなこと初めてですよ。　ただ、サブタイトルですごい迷う……

第四話　仰天＝絶句

「え……どういうこと？」
トオルは完全にバカにしているような顔で直人に言った。
「だから俺達以外、人間がいなくなったんだよ！」
トオルの言い方の所為か、それとも焦りの所為か、直人は再び激しい口調になった。しかし、いくら大声で言われても信じれるはずがない。人間が消えたなど。
「落ち着けって言ったのはお前だろ。少し静かに言え」
こう熱くなってしまっては聞けたいものも聞けないし、なによりうるさい。とりあえずトオルは直人をなだめることにした。
「で……どういうことだよ。人間が消えたって何でわかるんだ。正直信じられない」
本当の事をはっきりと言った。こういうのは悪い印象を与えるのだが、人間が消えたなどという法螺を吹くよりはいいだろう。
完全に信じていないトオルに、直人は癇に障ったが、頭を落ちつかせ冷静になりながら、静かな口調で喋り出した。
「俺の両親は、大きく分けると科学者なんだ。お前の思う科学者って言うのは、何か変な液体をこねくり回すとかそういうものかもしれない。いや、たしかにそういう人もいると思うけど、俺んちは違う。一言で言うと……人口について研究してるんだ」
「人口って、この世界に住む人の数ってやつ？」
「そうそれだ。その人口が、年々増加しているのは知ってるよな？」
「ああ、知っているよ」
知らなかった、なんて言えるはずがない。直人の口調からすると、それは当たり前の事のように思える。
「人口が増加し続けると、まず問題になるのが食料問題だ。人の数は増えても、食べ物の数が多くなるとは限らないだろ」
「うん……まぁそうだな」

曖昧な返事をした。正直言って、難しすぎて良く分からない。そんなの大丈夫じゃないかと思えてしまう。
「他にも問題になることがたくさんあるんだけど、結論としてはこのまま人口が増加すると大変なことになるってことだよ。それで俺の両親はそれを何とかしようと、秘密裏に人工を数えていた」
「ちょっとまて。人口を数えるって、まさか指で一人、二人、とか数えるわけじゃないんだろ。どうやって数えてんの？」
「国連に承認してもらい、人工衛星から送られるデータで数えている。二十四時間年中無休送られてくるデータの紙を、俺の家にある研究室でな」
トオルは思わず硬直した。身近にいる人間の親が、そんなにすごい人物だとは思わなかった。それを淡々と説明する直人も、なぜだかかっこよく見えてしまう。
もともとルックスは良い方だが、これで直人は完全にイケメン系となった気がする。
「でも……今日研究室から音がしなかったんだ。いつもは両親がせわしなく動いている音と機械音で絶えないのに、今日に限って何も聞こえなかった」
急に、直人も声のトーンが低くなった。直人の周りだけ、重たい空気が流れているようだった。
トオルは、買い物にでも出かけたんじゃないの、と言いたくなったが、さすがにそれは失礼過ぎると思い、のどの奥で止めておいた。
「それで家中探してみたら、なにか上の階から変なにおいと音が聞こえたんだ。まるで……なにかが腐っているみたいな、そんな匂いが」
「家中探したって……お前の家は豪邸なのか？」
「そんなことどうでもいいだろ！」
間髪いれずそう叫ばれた。トオルは思わずたじろぐと、
「あ……ごめん」
と短くつぶやいた。

「そして上の階の匂いがするところに行ってみたらさ……母さんと父さんが、殺されてた」

第五話　孤独＝愛情（前書き）

久しぶりの更新です。
そして、文章がバラバラです……

第五話　孤独＝愛情

「ただいまぁー」

学校から帰った後、いつも通りあいさつをした。おかえり、という返事は来ない。いつも通りだ。

さびしい、という感情はもはやない。いや、その表現は正しくは無いだろう。生まれたときからそうだったのだ。

ただ、直人は両親に嫌悪などいだいてはいない。むしろ立派な両親だと、誇らしげに思っているほどだ。

直人は几帳面に靴を並べ、自分の部屋へ流れるように行った。とくに使った様子もない自分の部屋で、肩で持っていたショルダーバックを下ろし、今日配られた手紙を整理した。

そのなかで、『授業参観のお知らせ』と書いてある紙だけをくしゃくしゃにしてまるめ、すぐそこにあった小さな円柱型のゴミ箱に投げた。

それから誰もいない食卓に行くと、冷蔵庫から冷凍ご飯を取り出し、電子レンジでチンをした。

温め終わるのを待つ間、テレビでも見ようかと横にあったリモコンに手を伸ばした。ボタンを押し、電源をつけようとする。

「あれ……」

なんどボタンを押しても、映るのは砂嵐だけだ。どのチャンネルに変えても、結果は同じだった。

「おっかしいな……。昨日はちゃんと付いたのに……」

仕方ないからテレビはあきらめ、ラジオをつけた。

いまどきラジオきいてんの、とトオルに言われたことがある。ラジオを聞くことがおかしいこととは思わなかったので、うんそうだよ、とあっさり言いきった。

ザザ……という音の後、そのまま他の音は流れなかった。ラジオも放送していないらしい。

不信感を抱きながら食を進めた。対話も音もなにもない、ひっそりとした食事だった。その時，直人の手が止まった。音が聞こえないのだ。いつもなら食卓にいても聞こえるはずだった、両親が仕事をしている音が。

「どうしたんだろ……」

席を立ち、奥の研究室に足を進めた。しかし、音は以前聞こえないままだ。

まもなく研究室の扉の前に立った。いや、その言葉は正しくは無い。なぜなら扉が開いていたからだ。普段ならば、鍵がかかっているはずだった。

研究室の中に、両親はいなかった。機械もすべてストップしている。音が聞こえるはずがない。

「なんで……うっ」

強烈なにおいが鼻孔を襲った。思わず口に手を当て、顔をしかめる。

「なんだよ、この匂い……」

手で口を覆いながら、静かに匂いの発生源を探った。少しでも息を吸うと、体全体が痺れるようだった。

結果、上の階この匂いの元凶があることを知った。静かな足取りで、上へ歩を進める。

直人の家の階段は、一つの段が高い。そのため、前方はその段におおわれて見えないということだった。別に不愉快だと思ったことは一度も無い。一歩が少し大きくなるだけなのだから。

その階段を、今回初めて呪った。

階段を登り切る直前に、段に隠れて半分ほど見えなかったがなにやら大きな物体が置かれてあった。

その物体を、おそらく自分は気付いていたのだろう。

赤い液体に埋もれた、父と母の姿を――

第六話　憤怒＝涙（前書き）

やはり長期休載があだとなったようです。文章がバラバラに……

第六話　憤怒＝涙

「殺されてた……？」
その言葉は、なぜかトオルの心を揺さぶった。目の前の直人は、涙も枯れている死人の様な眼をしている。その眼が、話しの信憑性を物語っていた。それと同時に、新たな不安が生まれた。
直人は、「両親が死んだ」という表現を使ってはいない。「殺された」と言っていたのだ。
ドクンドクンと心臓が高鳴った。知らず知らずのうちに体が震えている。
「それからお前はどうしたんだ？」
しわがれた声で直人にたずねた。
「思わず、階段を駆け降りたよ。その後、また研究室に行った」
「なんで研究室に？」
「確かめたいことがあったんだ。母さんと父さんの死体は、どう考えてもおかしかった。ところどころ、かまれているような感じがあった」
「かまれている？」
「どちらかと言うと、食いちぎられているっていう方が正しいかもしれない。なんていうか……獣に襲われたみたいな……」
両親の死体について、淡々と語っている直人が信じられなかった。親が死んだというのに、まるでなんでもないかのようだ。しかし、トオルはそのことについてはふれなかった。
「それで疑問に思って、研究室を調べてみた。そしたら驚いたよ……」
「なにかあったのか？」
「人口の数を管理しているのは一つの装置なんだけど、その装置が映している数値が「二」だったんだ」
「二？　それがどうかしたのか？」

「つまり……この世界にいる人間の数はわずか二人。つまり、俺とお前だけなんだ」
数秒、沈黙があった。体の震えが最高潮に達し、体中からどっと汗があふれてくる。信じられなかった。信じたくなかった。だが、自分の心のなかではなにも疑ってはいない。頭では信じたくないと思っていても、なぜか信じてしまう。
それは、先ほどあった携帯電話の一件が物語っていたからだ。
母は携帯電話を忘れて行ったのではない。すでに、この世に存在していなかったのだ。
「母さんが……父さんがいない……？」
自分が無意識に言った言葉が怖くなった。恐ろしくなった。これを現実と呼びたくなかった。
「お前の両親だけじゃない。この世界に存在する人間全てがだ。俺とお前を除いて」
瞬間、トオルは直人の胸ぐらを掴んだ。自分の顔の近くへ強引に寄せ、ぐっと拳を握る。
「なんでそんな冷静なんだ！　もうこの世界には俺とお前以外いないんだぞ！」
なにかにぶつけたかった。さきほどから湧き上がる、なんともいえない不安感を。わけもなく叫びたくなる。
「ごめん……」
直人の眼から涙がこぼれる。分かっていた。直人だって無理に冷静さを保たせているだけだと。
トオルは、つかんでいた手を放した。これからどうしたらいいのだろうか？　そもそもなぜ自分達だけ残されているのか。不安は容赦なく駆けあがってくる。
「これから……どうしよう？」
直人にすがるようにたずねた。直人は眼の上にたまった涙を手の甲で拭くと、口を開いた。
「それが……」

その次の言葉を言おうとした瞬間、直人は急に肩を押さえた。「ぐっ！」と小さな悲鳴を上げ、顔をしかめる。
「どうした？」
トオルはのぞくようにその右肩に目線を映す。その肩――性格には手だが、そこには赤い液体が滲んでいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9586w/

祈りをささげる

2011年11月12日22時14分発行